

## 物語史の輪郭と初期物語成立の一様相

神野藤 昭 夫

### はじめに

はじめに、本稿のなりたちについて述べて、お断りをしておきたい。

本稿は、東方学会の依頼により、英文による学術雑誌として公刊されている「ACTA ASIATICA」83号(二〇〇二年八月刊行予定)に掲載予定の邦文原稿として執筆したものである。同号は、「物語研究の現在」と題する特集を組み、福田秀一氏の緒言以下、神野藤昭夫、室城秀之、日向一雅、辛島正雄、三角洋一の諸氏の論文がこの順序に掲載される予定であって、論者には、表題のようなテーマがもとめられたわけである。

したがって、本稿は英文による論文として広く海外で読まれることを前提に執筆したものであって、邦文原稿じたいは筐底にとどめおくつもりのものであった。

しかるに、平成十四年度より、国文学科が、美学美術史学科・英文学科・文化学科と統合改組され、新たな構想のもとに人文学科として発足するにあたり、跡見学園女子大学「国文学科報」としては終刊号を迎えることとなった。その掉尾を飾る号の一端に加わりたいという願いを抱いたものの、いま新稿を起すだけの余裕がない。そこで、東方学会のお許しを得て、本稿を発表することにした次第である。

海外の読者を意識し、また翻訳しやすいように、引用などでもできるだけ現代語訳の形式にあらためてあることや、内容的には、論者の既発表の著者や論文と重なることが多いが、ことさらに書き改めることをせずに、ふりがな等を省略したほかはほぼ原態のままとした。

## 物語史の輪郭をどうみるか

本稿は、物語の時代を鳥瞰して、物語史をめぐる基本的な問題を考えること、および『源氏物語』以前の物語世界の特色、特に初期の物語がどのように成立してきたか、その様相の一角に光を当ててを課題にしたい。

物語とよばれる時代は、いつごろからいつごろまでを範囲と考えたらよいか。その始まりは、九世紀末ごろとみることにしている。さほど異論はないだろう。しかし、物語の時代をどこでどう線引きするかということについては、曖昧なまま、熱心には論議されてこなかったといえよう。

長い間、物語は、十一世紀初頭の『源氏物語』の出現を文学的ピークとし、十一世紀半ば過ぎの物語流行の最盛期には『狭衣物語』や『夜の寝覚』あるいは『浜松中納言物語』のような物語群を生み出すが、やがて『とりかへばや物語』のような物語をもつて、そのジャンルとしての実質的な生命力を終える、というイメージが多くの人々の脳裏を支配してきた。物語史における後期物語とか末期物語という時代区分もまた、基本的には平安時代を出ることがなかったのである。

鎌倉時代(一二九一—一三三三)から南北朝時代(一三三三—一三九二)、さらに室町時代の初期あたりを下限として登場する物語群については、これを擬古物語と称して一線を画し、物語史としては質量ともに残余のものと見なされ、まともな評価対象

としては軽んじられてきた。擬古とは古い時代のものに似せた、及ばない作品、それじたいには価値が認められないというニュアンスをもつ。それに対して、これらの物語群を、鎌倉時代物語、中世小説、あるいは中世物語などの呼称を選びとる立場は、擬古」という価値判断を排して対象を捉えようとする点において進んではいるが、平安時代の物語とは一線を画してみようとする点では、軌を一にするところがある。

しかるに、最近では『中世王朝物語全集』の刊行に代表されるように、後者の物語群を「中世王朝物語」と呼称しようとする提唱がなされ、しだいに定着する傾向にある。<sup>(1)</sup>これに対応する概念は「王朝物語」であるから、中世王朝物語という概念は、王朝物語としての連続性を認める一方で、中世を冠することによって、不連続性あるいは従来の王朝物語との差異化が図られているとみることができる。そこに従来の物語史理解の更新が図られている点を評価することができよう。

しかし、物語の時代を大きく捉え、次なるお伽草子(室町物語・室町時代物語・物語草子・中世小説などもよばれる)の時代との大局的な把握を考えると、その差異を明瞭化する呼称を採用することの是非は、なお今後の課題として残されている。

いったい、これまでの物語研究は、寥寥たる現存する物語を対象とするものであった。現存する平安時代物語は、十編からなる短編物語集である『堤中納言物語』の諸作品を個々に数えたところで、二〇編をこえるかどうか過ぎない。中世王朝物

語は、本文としては『鎌倉時代物語集成』七巻が三四編の物語を収め、口語訳に注までつけた『中世王朝物語全集』二三巻が二九編あまりの物語を収める予定で、現在刊行中である。数だけみても、現存する平安時代物語の数を上回っており、物語というジャンルや物語史をどう把握するか、あらためて問題の捉え直しが求められている状況にあるといえよう。

しかし、現在まで残っている物語を研究すれば、かつての物語史の時代の実態を反映する姿がおのずから浮かび上がってくると考えてよいのかどうか。あるいは、それらの物語は、歴史という評価の荒波をくぐりぬけた優れた作品群であると考えてよいのかどうか、ということになると、当然のことながら、そうかんたんに肯定できない。

現存する物語の背後には、膨大な失われた物語があったと考えてみる必要がある。今は散逸した物語世界が幻のように広がっている。幸い、それらの中には、物語の名称だとか、さらには物語の内容を推測させてくれる資料がある。これらの物語群は、長らく「散逸物語」と呼ばれてきた。存在の痕跡を具体的に残しているのであるから、厳密にいえばこれらを「散逸物語」と呼ぶのは矛盾しているが、既に学術用語として定着しているので、ここではそのまま使用する。

これまでの散逸物語研究は、第一に、どのような物語が存在したか、その痕跡を集め、その目録を充実させること、第二に、そのような化石の痕跡から物語内容を復原することに関心が注

がれてきた。<sup>④</sup>第三に、現在ではさらに、そこからの応用として、物語史の空白部を、散逸物語によって埋めることへと研究の関心が移行してきている。<sup>⑤</sup>

しかし、このような散逸物語研究の発想は、現存する物語を前提とした研究であって、ほんとうは、発想を逆転させなければいけないのではないか。つまり、第四に、散逸した物語の側に立って、現存する物語を眺める視点が必要である。

このような視点を持たないと、現存する物語を歴史的にたどれば、それが物語史の典型的反映ということになったり、既存の物語を優れた作品の歴史として固定化してしまうことになりかねない。散逸した膨大な物語の歴史のうえに、たまたま現存する物語が、そここに浮遊しているにすぎないのではあるまいか。そういう柔軟な、逆転した捉え方が必要であって、物語の全容を捉えようとすると、そのような発想がきわめて重要な意味をもつと考えられる。<sup>⑥</sup>

とはいえ、このような研究目標を解明するための方法が具体的に確立しているわけではなく、このような問題意識のもとに、個々の事例に即して工夫を凝らすほかないというのが、現在の研究状況である。

さて、あらためてそのような散逸した物語群まで視野を広げて、散逸物語を、A「平安時代に属する物語」とB「鎌倉時代に属する物語」に分けて、そのあらましを数量的に示してみることにはしたい。

今、Aについては時代区分を試みにほどこしたが、これらはもっぱら依拠資料による制約が大きい。Bについては時代区分が困難である。そこで散逸物語を資料別に整理することとした。また、BにはAに入るかもしれないものや室町時代物語（お伽草子）に入れるべきもの、物語として認定するには妥当を欠くかもしれないものを内包している可能性がある。さらに散逸物語として認定してよいかどうか、判断に迷う事例もあるが、あくまでおおよその数量を示すところに目安において、これらの数も算入してあることをお断りする。

Bの鎌倉時代に属する物語の最大の資料宝庫は、文永八年（一二七一）に成立した、物語内の歌を勅撰集に準じて編纂した『風葉和歌集』であるが、これについては、所載歌数の分類を試みである。所載歌数の多寡が物語の分量をある程度反映していることが認められており、その傾向を推測することができる。と考えたからである。

A平安時代に属する物語

(1) 『竹取物語』の前後◇一〇世紀前半までの物語 下二編

(2) 『うつほ物語』の前後◇一〇世紀中頃から後半の物語 下二編

(3) 『源氏物語』の前後◇一〇世紀後半から一一世紀初頭の物語 下二六編

(4) 『狭衣物語』の前後◇一一世紀末までの物語 下二七編

①天喜三年（一〇五五）成立の物語 下二七編

②一一世紀中頃までに成立した物語（『更級日記』とその奥書所引の物語） 下五編

③一一世紀後半までに成立した物語（平安後期物語所引の物語） 下二四編

④一一世紀までに成立した物語（『無名草子』による） 下四編

(5) 『無名草子』以前の物語◇一二世紀の物語

①一二世紀前半から中期にかけての物語（主に『無名草子』による） 下九編

②一二世紀後半の物語（『無名草子』による） 下四編

③『無名草子』によらない一二世紀の物語（一二世紀以前成立の可能性をも含む物語） 下五編

④平安時代の物語と推定されるもの及び疑義を残す物語 下八編

B鎌倉時代に属する物語

(1) 『風葉和歌集』による物語

(a) 二〇首以上の物語 下三編

(b) 一九首から一〇首の物語 下二〇編

(c) 九首から五首の物語 下二四編

(d) 四首から三首の物語 下二四編

(e) 二首から一首の物語 下八四編

(f) 逸名物語 下八編

(2) 『和歌色葉集』（寛文版・卷三・物語名）による物語

(3) 『蔵玉和歌集』による物語

(4) その他の資料による物語

(5) 物語断簡による逸名(未詳) 物語<sup>(6)</sup>

▽三六編  
▽七編  
▽九編  
▽二〇編

Aとして掲出したもの一〇五編、Bとして掲出したものは二二五編、あわせて散逸物語としてリストアップできたものは三三〇編に及ぶ。この数は、ひとつひとつの資料について、研究者の判断に揺れが出てくるにちがいが、ひとつの目安になるであろう。

本稿では、これらのデータを詳細に検討することはないが、現存する物語の数においても、散逸物語の数においても、鎌倉時代以降も、おびただしい数の物語が作り続けられているという事実が明らかとなる。もとより、もはやその存在の痕跡さえ残さない、文字通りの散逸した物語世界を想定したならば、その数の分布に大きな変動が出てくるにちがいない。しかしながら、これだけのデータをもつてしても、物語というジャンルが、平安時代を黄金期とするものであって、鎌倉時代以降の物語は質量ともに衰退してゆくという物語史像は慎重な修正をもとめられているといえるのではないだろうか。

少なくともいわゆる中世王朝物語の作者やその読者たちにとっては、自分たちの物語はジャンルとして王朝物語とひとつづきのものであって、別物とは考えていなかったと判断されるのである。

では、彼らが同一と認識していた物語とはどのようなものであったろうか。それは基本的には「作り物語」という概念に帰結させることができると考ええる。

「作り物語」という概念は、現在、虚構による物語という意味の学術用語として広く用いられているが、ここでは共時的概念としての学術用語の用法からひとまず距離をおいて、その用例や観念について検討を加えてみることにしよう。

いったい「作り物語」という呼称は、一二世紀後半に成立した歴史物語である『今鏡』に「作り物語のゆくへ」として出てくるものを初例とする。『風葉和歌集』の序文では、「古今和歌集」の序文の修辞を利用して、「つくりものがたりのうたといふものなむいつはりなれたる人のいひ出でたることにのみなりて、まめなる所にはほにいだすべきにもあらざれば〔作り物語〕の中の歌は、うそいつわりをいうことに馴れた人が詠んだものばかりであつて、あらたまつた公の場に表だつて出せるものでもないので」と述べられている。社会的に認められることなくむなしく埋もれている、いつはり虚構による物語「作り物語」の中の歌を救済し、認知しようという意図から出たものであるとの宣言であるが、「つくりものがたり」と限定することによって、現に、歌物語、説話的な物語、歴史物語の類にみえる歌は排除されているのである。

ここには、物語とは「作り物語」のことであるとすると明確なジャンル意識が認められる。「ものがたり(物語)」が談話を意味

するならば、「物語（ものがたり）」は想像力にもとづく虚構を本質とはしない。虚構のものであつても、本当のものとして語られるのが物語であつた。物語が虚構以外のなにもでもないことを、本物に似せて作られたものであることを明確に意識し言明したところに、「作り物語」の語の出現があつたといつてよい。

鎌倉時代の初頭に成立した『無名草子』には「作り物語」という用語はみえないが、物語は「書く」ものではなく、「作る」ものであることを明確に使い分けていることに注目させられる。

紫式部が『源氏物語』を「作り」、清少納言が『枕草子』を「書き集め」たのをはじめとして、前に申し述べたいいくつかの物語は、多くは女性の手になつたものではないでしょうか。（新編日本古典文学全集『無名草子』二六三頁）

ここでは「書く」と「作る」とが明らかに使い分けられている。清少納言の『枕草子』は「書く」ことよつて成立した作品なのであつた。『枕草子』という作品に、自分自身で「書きあらわして」いますから、ここではこまかに申し上げるには及びません（二六七頁）。「その『枕草子』こそ、彼女の心の様子がよく見えて、たいそう興味深く思われます。あれほど興味深くも、すばらしくも、りっぱであることもを、残らず「書き記し」た中に、皇后定子の、りっぱで、栄華の盛りにあつて、天皇の寵愛を一身に集めていらつしやつたことばかりを、恐ろ

しいほどまざまざと「書き出し」て（二六七頁）などという叙述は、次の『源氏物語』についての叙述と対照してみるならば、書き分けの意識は明瞭であるといえよう。

それにしても、この『源氏物語』を「作り」出したことは、どう考えても、現世においてだけではなく、前世からの因縁によるかと珍しく思われます。（この物語よりあと）の物語は、考えてみるとたいそう簡単なはずです。『源氏物語』をひとつの知識として「作る」としたら、『源氏物語』よりまさつたものを「作り」出す人もきつとあることでしょう。それがわずかに「うつつほ」「竹取」「住吉」などぐらいを物語として見ていた程度で、あれほどの傑作に「作り」あげたのは、ふつうの人間のしわざとも思われなかつたです。（二八八頁）

『無名草子』では、物語は「作る」ものであるとする用例は、複合語を含め、一四例に及んでいる。しかもこの場合の「作る」という語には、あらたに物を制作するという意味にとどまらず、無いものがあるかのように語る、まさに仮作するという語感を潜めているのである。すなわち物語の本質は「作る」ところにあり、物語の本流は「作り物語」にあるという認識があつたことを認めることができることになる。

このような「作り物語」観念は、これらの用例の出現よりも遙か以前に生まれ出ていたと推測されよう。今、そのような「作り物語」意識を遡るならば、その明瞭な分水嶺は『源氏物語』

にあるとみてよい。このような「作り物語」意識が、『栄花物語』や『大鏡』などの歴史物語や『今昔物語集』などの説話物語と、ゆるやかな線引き機能を果して、物語なるものの範疇を明確化し、しかる後に、「作り物語」の語例が出現するとみられるのである。

このような物語なるものの意識に注目すれば、平安から鎌倉さらに南北朝以降にまで裾野を広げている物語群を切断して捉えるよりも、むしろ連続性の方を重視すべきであるということになる。『源氏物語』を山嶺とする物語の山脈は、基本的にはひとつづきのものとして捉えるのが適切である。物語は平安時代をもって終焉を迎え、そのちの物語は擬古物語とよんで、残余のように捉える旧来の見方は捨てられるべきである。さらにいえば、中世王朝物語という概念もまた、あくまで物語としての連続性を前提としたうえで、その不連続性をいうだけの特質をどう明らかにするかという課題を残している。

このような「作り物語」という山並みがゆるやかに下って、それと重なるようにしてあらたな山並みが立ち現れてくる。それがお伽草子（室町時代物語）という、物語山脈におけるあらたなジャンルの登場として、物語史のゆくすえを展望することができる。

これに対して、時間を遡って分水嶺の向こう側は、『源氏物語』以前の物語世界ということになるが、そこでは物語なるものが、必ずしも一定の「作り物語」意識で固定化されていたわ

けではなく、流動性と多様な広がりにも満ちていたとみることができることとなる。端的な例でいえば、『伊勢物語』に代表される歌物語があるし、物語流行の刺激が『蜻蛉日記』のような物語に準ずる文学を生み出し、さらには野性と混沌に満ち溢れた『うつほ物語』のような物語の登場は、物語史が豊穡な可能性を孕んでいたことを示唆している。

しかるに、『源氏物語』の出現は、それが物語なるものの典型となることによつて、それまでの物語がもっていた多様で雑多な可能性と広がり、が、「作り物語」という標準化されたジャンル意識の確立へと収斂させられてゆくのであるといえよう。『伊勢物語』は「作り物語」としては認定されないことによつて、物語の枠組みから排除されることになる。具体的には、『無名草子』においても、また既にふれたように『風葉和歌集』においても、批評あるいは採歌の対象からははずされるのである。そうした『源氏物語』という分岐点をもちながら、物語の時代は、大局から眺めるならば、九世紀末から一五世紀の初めまで、約五〇〇年余りに及んだと把握できるのではなからうか。

### 『はこやのとじ』からみた初期物語の成立事情

さて、そのような物語史の始発部における状況は、どのようなものであったか。これまでの初期物語の世界に対する認識は、きわめて数少ない物語を基盤に、物語史像を組み立てようとしてきた。これまた決して数多くないといふものの、散逸した

物語の存在がじゅうぶん視野に収められてはいないという憾みがある。《作り物語》に収斂させられる『源氏物語』以後の物語に比較するならば、『源氏物語』以前の物語世界は、もつと多様な広がりや混沌に満ちていたことを少しづつ明らかにすることができるとはではないか。

ここでは、物語史の初期に存在し、今は失われた物語をとりあげて、物語が成立してくる様相を探ってみよう。

『源氏物語』(蓬生)巻)で、高貴な生まれながら、時代から取り残され、落魄の生活を続けている末摘花という姫君が、古びた厨子から①「唐守、藐姑射の刀白、かぐや姫の物語の絵に描きたるを」慰めにみていたという。『かぐや姫の物語』(『竹取物語』)が、初期物語の代表とする物語とすれば、『唐守』や『藐姑射の刀白』もまた同時期の物語とみられる。

ここで注目したいのは、『藐姑射の刀白』である。この物語の基本資料は、このほかに②『風葉和歌集』(巻十四・恋四・九七七)、『源氏物語』の注釈書である③④『河海抄』(『玉鬘』「行幸」巻)、⑤『花鳥余情』(『藤袴』巻)、⑥『源氏物語若紫巻古註』、⑦『実隆公記』(延徳三年(一四九二)二月九日の条)、⑧泉州本『伊勢物語』などにみえ、読解にきわめて困難な資料を含むが、内容の概要を伝えてくれるのは、②である。

てりみちひめとりかへされ給ひてよませ給ひける

はこやのとじのふとだまの帝の御歌

いへどいへどいふに心はなぐさまず恋しくのみもなりまさ

るかな

(てりみちひめをへはこやのとじに)取り戻されたのちにお詠みになった歌／はこやのとじ物語のふとだまの帝の歌／いくら嘆きを口にしたところで、てりみち姫を取り返されてしまったこのつらい気持ちは慰められない。恋しさばかりがいよいよ募ってくる。)

「はこや」というのは、『莊子(zhuangzi)』の「逍遙遊」にみえる仙人の住む世界として知られているが、その仙界の刀白(年輩の女性を敬意をこめてよぶ語)と地上のふとだまの帝との間で、てりみち姫という女性をめぐる争奪があり、結局、姫は仙界に帰っていった話であると推測される。

ところで、右にあげた資料のうち、特に注目したいのは、⑧である。これは現在広く知られている定家本『伊勢物語』一二五段の中にはみえない別系統の本文であるが、原本は戦災で消失し、活字翻刻によって研究がなされてきたものである。

むかしをとこすゞなる所に行て夜あけてかへりける  
を人々いひさはぎければ

(a) 月しあればあけむ物とはしらずして夜ふかくこしをひとみ  
けむかも

この事どもは

(b) にはもせにおふるあさでかつみはやすはこやのとじのさき  
のごとしも

(泉州本『伊勢物語』)

前半の詞書は、「昔、男がなんということもない女のもとに出

かけ、夜が明けて帰ったところ、それを見とがめた人々が騒ぎたてたので」ということだろう。それに対して(a)の男の歌は、「月が明るかったから、夜が明けたかどうかからず、まだ夜が深いうちに帰ってきてしまったのを人が見とがめたのだろう」の意か。ただし、この部分は、伝為氏本とよばれるテキストに異文があり、なおかつ(a)の歌は、『万葉集』(巻十一・二六七三)及び『古今和歌六帖』(第五・二七三六)に類歌がみえるが、ここでは深入りをせずに、大局を押さえるにとどめる。

それに対して、後半部はどうか。ここは泉州本のみのみえる独自箇所であるが、いったいどう解釈したらよいか、難解な部分である。後半部の詞書は、前半部のような話に対して、このことはこういうことと同じだと、語り手がつけ加えているという形式になっているのではないか。「庭いっばいにはえている麻手の姿のように、朝こっそり女の家を出てゆこうとしているのか。はこやのとじの先のように」と解釈できようか。「あさ」には「麻」と「朝(出)」とがかけられていることになる。「麻」はまっすぐに伸びて二、三メートルの高さになる。その葉はすくくと伸びた茎の先に両手を広げたようにしており、人の姿に見立てられていよう。

ここに出てくる「はこやのとじ」は、「貌姑射の刀自」の物語と同じと見てみたいのである。すると「つみはやす」⇓「はこや(のとじ)」という形容関係が気になってくる。「つみはやす」は「摘みはやす」(摘み取ってもてはやす)の意味ではないだ

ろう。とすればどう解釈できるか。

この「つみはやす」は「柘(つみ)生やす」ではなからうか。九世紀末年に成立した漢字の字音・字義・和訓を施した『新撰字鏡』には「柘」が「豆美之木(つみのき)」と訓がつけられている。また一〇世紀前半に成立した源順の手になる最初の漢和辞書『倭名類聚抄』には、「毛詩注」によって「桑柘」と示され、音が「射(シヤ)、訓が「豆美(つみ)」とあり、さらに「蠶所食也(蠶の食するところなり)」とみえる。「柘」は蚕の食べる桑、山桑のことを意味していることになる。

山桑の生えている世界それが「はこや」だったのである。そういう観念が「柘(つみ)生やすはこやのとじ」という表現を成り立たしめているのである。

では、「はこや」には「柘」が生えていたのだろうか。そこで想起させられるのが「柘枝伝説」との関係である。この伝説について、(1)『万葉集』、(2)『懷風藻』、(3)『続日本後紀』などよって、その輪郭を知ることができるが、特に『懷風藻』では、「柘」と「貌姑射」とが結びつけられ語られていることに注目させられる。すなわち『懷風藻』にみえる、吉野での詠詩、十名、十五首のうち、八首までがなんらかのかたちで柘枝伝説を踏まえているのである。

その典型的な例を二、三示すならば、高向諸足(一〇二)。日本古典文学大系69所収『懷風藻』の通し番号。以下同じ。は、次のような意味の詩を残している。

昔、この吉野川では魚を釣っていた男がいたが、ところが今、ここには天子に従う貴族たちがいる。彼らは琴を弾いて仙人とたわむれたり、川遊びをして仙女と親しみあっている。すると冷たい波間に柘枝媛つげのひめと美稲みいねの相聞歌が聞こえてくるようだ。あの春の霞の風景は、今秋の風に吹かれている。誰がああ「姑射」の嶺はどこだろうかなどというか。帝がお車をとどめているこのところこそかの望仙宮そのものなのだ。

この詩は、昔、魚を釣っていて流れてきた柘の枝を拾ったところ、それが柘枝媛に変じ、二人は愛を交わしあつて、藐姑射の世界と交流したという伝説を下敷きに、吉野の地を神仙の地に見立てようとしたものであった。

紀男人（七二）は「か的美稲が、流れてきた柘の枝に出会ったという中洲に立つて、枝が流れて来はしないかと去りかねている」と歌い、中臣人足（四五）も「ある朝、美女に変じた柘の枝と出逢った民がいる」といい、藤原万里（九八）もまた「美稲と柘枝媛の恋歌の声音は遠い昔のことだが、今、谷間には笙が新たな音色を響かせている」と表現している。

『懐風藻』の吉野の詠詩のなかでは、人々は、このように柘枝伝説という古い伝承を共通の題材に取り上げているのである。

彼らの柘枝伝説の受容のありかたは、丹墀広成（九九）が「美稲が仙女に逢った吉野の地は洛洲に同じだ」と歌っているが、

「洛洲」の語が中国の『文選（wenxuan）』巻十九に出てくる曹植（caozhi）の「洛神賦（luoshenfu）」に見えるように、柘枝媛を仙女に見立て、そのことよって吉野の地を仙地としてイメージ化しようとしている。古伝承が神仙譚の枠組みの中で理解されていることは明らかである。

では、彼らは、吉野の地に伝わる土着の伝承そのものを漢詩の中に昇華させているとみてよいのであろうか。

ここで、想起されるのが『万葉集』巻第三にみえる「仙やまびら柘枝つげのえの歌三首」（三八八―三九〇）である。三八八番歌は次のとおりである。

あられ降り吉志美が岳たけを陰かげしみと草取りかなわづら妹が手を取る（三八八）

右の歌は「吉志美が岳が、けわしくて、草につかまりそこなつて、妻の手を取る」の意であるが、その左注に「右の一首の和歌は、ある伝承では、吉野の人味稲が柘枝仙媛つげのひめに与えた歌であると伝える。だが「柘枝伝」を見たが、この歌は出てこない。」と記されている。ここから、三八八番歌を含んだ古伝承が存在し、それを書記した「柘枝伝」という著作があつたことがわかる。ところが三八八番歌は「柘枝伝」にみえないとの注である。三八八番歌の和歌が生かされ記されていないのは、それが漢文によつて書かれた伝奇作品、それも神仙譚の潤色を加えた作品であつたからであると判断される。なお、三八九、三九〇番歌は柘枝伝説を聞いた男たちが詠んだ歌であつて、三八八番歌と

は位相を異にする。

あらためて『万葉集』の三八八番歌を他の類歌とつきあわせ、この歌がどのような場で歌われたものかを考えると、男女が山などに集まり詠み交わされた恋歌に由来すると判断されるのである。そういう性格の歌を含むところの伝承をもとに神仙譚的漢文伝奇としての『栢枝伝』が書かれ、そうした共通教養のもとに『懐風藻』の詠詩は登場するという関係にあるとみるのが適切なのではなからうか。

また『続日本後紀』の嘉祥二年（八四九）三月二十六日にみえる情報は、次のようなものである。

時の仁明天皇の四十賀を祝って、興福寺の大法師たちが奉った絵の中に、「吉野の女」が「眇はるかに天に昇つてゆく」ありさまをえがき、それに長歌が添えられたという。その長歌の中に「栢の由求むれば（栢の由来をたずねると）という一節がみえ、「故事」として、

三吉野に ありし熊志禰 くましね 天女の あまのめ 来り通ひて その後は 譴せめ蒙りて 毗ひれ礼れい衣着て 飛びにきと云ふ

（吉野の地に住んでいた熊志禰のもとに、天女がやってきて暮らしていたが、その後、天女は天のがめを受け、ひれころもを身につけて、天へ飛び去ったと伝えている）

と語っている。

(1)から(3)の資料からうかがえる古伝承としての栢枝伝説の骨格は、川上から流れてきたものが姿を変え結婚するというへ丹

塗り矢型）とよばれる説話に、やがて天へと去つてゆくという（天人女房譚）とかへ羽衣伝説）などとよばれるへ白鳥処女説話の話型が複合したものと理解することができるといえる。

以上のような情報をもとに糸をたぐり寄せるように、結びつけてみるならば、どのようなことがみえてくるだろうか。

古伝承としてのへ栢枝伝説）があり、それをもとにしたところの『栢枝伝』とよばれる漢文伝奇作品があること。このことがまず確認される。次にこれが『はこやのとじ』となんらかの關係をもっていることが推測される。その關係はどのようなものか。両者の対応關係を圖示してみるならば、次のようになる。

『栢枝伝』の場合

『はこやのとじ』の場合

美稲（熊志禰とも）

ふとだまの帝

栢枝媛

てりみち姫

菟姑射（譴）による天への回帰

はこやのとじによる奪還

このようにみるならば、『栢枝伝』と『はこやのとじ』とはへはこやを共有する対応構造を持つていことがわかる。

『はこやのとじ』はただちに『栢枝伝』の翻案であったとは言えないが、『栢枝伝』の影響下に成立した物語であったとの推測はできるのではないか。

古伝承としてのへ栢枝伝説）がいきなり『はこやのとじ』という物語へと、直結するのではなく、『栢枝伝』という漢文伝

奇を媒介に『はこやのとじ』という物語が成立して行くという道筋を想定することができることになるのである。

これまで、初期の物語の成立は、中国の六朝以来の「志怪小説」や唐代の「伝奇小説」に触発されて日本版の漢文伝奇群が生まれ、そういうものと踵を接するようにして物語が誕生して行くのではないかと、仮説としては説かれてきた。しかし、それは仮説の域を出なかつたわけであるが、ここでは、そうした道筋を具体的に考えてみる手掛かりが得られたことになる。

『はこやのとじ』は「柘枝伝」を単純に和文化的なものではないだろう。『はこやのとじ』資料の中の⑥『源氏物語若紫巻古註』には、「からくにのうとむげのありがたき御心」という表現が『はこやのとじ』の逸文として出てくる。「中国（げんみつ）はインドつまり天竺とありたいところだが」の三十年に一度花を開くだけという「優曇華」のように、まことにまれなありがたい御心」というのは、ふとだまの帝のてりみち姫に対する心であつて、二人の間にはきわめて人間的な感情の交流があつたと推測できる情報である。さらに⑤『花鳥余情』藤袴「巻の」うつたへに御事をいなみのいなみきこゆるにも」もまた『はこやのとじ』の文章の一節が端切れのように残されたもの。これは、はこやへと取り戻される姫の拒絶の表現ではあるまいか。既に掲出した②の歌は、ふとだまの帝がみずからのものとすることができたてりみち姫を奪ひ返されて、絶望的な嘆きの中で姫を追慕している物語の最終的な場面へと連なる「こまにあて

嵌めることができる。

このような心情を描く細部に注目するならば、『はこやのとじ』は、『柘枝伝』に抛りつつ、神仙譚的なできごとを綴ることから、できごとのところを綴る物語へと離陸していったのではないかと判断できよう。

既に指摘のあるところだが、『はこやのとじ』は『竹取物語』とも共通の構造をもっているわけであつた。

『はこやのとじ』の場合 『竹取物語』の場合

ふとだまの帝

帝

てりみち姫

かぐや姫

はこやのとじによる奪還

月の都への回帰

地上と仙界あるいは天上、帝と姫の人間的な感情交流、姫の異界への帰還と帝のかぎりない追慕、など両者の関係は、きわめて深いものがある。

『柘枝伝』と『はこやのとじ』との関係を重視すれば、『はこやのとじ』は『竹取物語』に先行していたのかもしれない。少なくとも『竹取物語』はこのような作品群のうえに成立したすぐれた作品として評価されたとみることができる。

『はこやのとじ』と『竹取物語』を比較して、『はこやのとじ』の側に欠落しているのは、『竹取物語』における五人の求婚譚にあたる部分である。

それを補うかのように存在しているのが「唐守」である。「からもり」という物語は、からもり長者の娘に恋した男が、難儀のすえに、長者の家にたどりつくが、彼が出会ったのは尋常ではない女性であったという話らしい。長者の家の門を入ることがじたいが難題に匹敵すると考えられているように、難題求婚譚の様相をもつ。とすれば、「はこやのとじ」と「からもり」とを、合成したところに「竹取物語」の位相があるということになる。

『竹取物語』は、もとより怪奇なできごとをそのものへの興味から、これを伝承しようとしたり、神仙譚そのものの再現をめざしたのではない。異なる世界への憧憬と断絶とをえがいて、この世を根拠づけ、人間という存在を凝視したところその主題がある。

『源氏物語』「総合」巻が、『竹取物語』を「物語の出で来はじめの親（物語が歴史に登場してきたころの代表的作品）」と規定したとき、これは物語が『竹取物語』を源流として展開してきたということの事実の反映というより、ジャンルとしての物語なるものをはっきり意識した『源氏物語』とその時代が、過去を捉えなおしたときの、新たな文学史的発見として、このような物語把握がなされたものと理解すべきであろう。実際の初期の物語はその世界は、もつと多様で雑多な広がりをもっていたことを想像してよいと考えることができる。

注

- (1) 「中世王朝物語」を名乗った研究書には、大槻修「中世王朝物語の研究」(世界思想社 一九九三年)、大槻修・神野藤昭夫編「中世王朝物語を学ぶ人のために」(世界思想社 一九九七年)、辛島正雄「中世王朝物語史論」上下(笠間書院 二〇〇一年)などがある。
- (2) 市古貞次・三角洋一編「鎌倉時代物語集成」一・七巻、笠間書院 一九八八年・一九九四年。なお別巻が二〇〇一年に出て完結した。「中世王朝物語全集」二三巻、笠間書院。
- (3) 近世の目錄学的著作は、横山重・巨橋頼三編「物語艸子目錄」(角川書店 一九七一年)に収められている。
- (4) 代表的業績に、松尾聰「平安時代物語の研究」(東寶書房 一九五五年)、小木喬「散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編」(笠間書院 一九七三年)、樋口芳林呂「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」(ひたく書房 一九八二年)がある。
- (5) 物語史的展望のなかで散逸物語を論じたものには、三角洋一「物語の変貌」(笠間書院 一九九六年)がある。
- (6) 神野藤昭夫「散逸した物語世界と物語史」(若草書房 一九九八年)は、このような問題意識のもとに書かれている。
- (7) 具体的な物語名および依拠資料については、神野藤前掲書を参照されたい。
- (8) 神野藤前掲書の第二刷では一編追加した。
- (9) 以下の論は、「はこやのとじ」からみた物語の成立と初期物語像(神野藤前掲書)及び「ふること・漢文伝・物語——はこやのとじ」再考(「文学・語学」一六六号、東京大学国語国文学会 二〇〇〇年三月)で、詳細に論じたところであるが、なお仮説の域を出るものでないと判断するので、私見を整理し、広く批判を得ることを願っている。
- (10) この資料の詳細については、神野藤前掲書を参照されたい。
- (11) 「光言句義釈聴集記」(高山寺資料叢書7「明恵上人資料第二」)東京大学出版会 一九七八)に「カラムリ長者カ家ハ法門ニ似タリ、我能ク知りタリト云テアレハ実ニ入ル、能ク知りタリト云トモ知ラ

スハイラルマシキ也」とある。「からもり長者の家は法門ぽうもんに似ている。私はよく知っているといいその通りであれば中に入ることができ。よく知っているといてもほんとうに知らなければ中に入ることはできない。」の意であろう。同書の脚注に「からもりの家の門に入ること自体が一つの難題（古物語の世界での）であったことを本書の行文が語つてゐるのではないだらうか。」と記している。